

アトモスフィア

サイエンス・コミュニケーターの奨め

石村 巽*

近年、サイエンス・コミュニケーターという言葉をよくきくようになった。寺田寅彦や中谷宇吉郎を思い出す先輩もいるし、文科省が欧米にならって養成しようとしている人材（科学技術政策研究所，2003年）だと教えてくれた人もある。サイエンス・ライターからジャーナリスト，理科の先生，科学書編集者，SF作家などの多くの職種を含み，科学リテラシーを高めるために活動する人間のことだという。「私は市民に科学を説明したり，科学をひろめたり，研究者と他の誰かをつないだりする人たち」（浦山毅，つくば生物ジャーナル4，2006）という定義が好きだ。

ところで，私は大の子ども好きである。定年後の5年間を米国で過ごしたところ，ますます子どもが好きになった。年をとったことや，多少ながらボランティア活動を経験したことの影響かもしれない。いずれにせよ，帰国して早々にNPO・理科教育改革支援（SSISS）に入会して，そのお手伝いをはじめた。創始者である大木道則先生とご一緒に小・中学校へ行くのはいつも非常に楽しい。ただ，子どもにやさしく語りかけるのはなかなか難しい。悩んでいると「貴方が小学生を上手に教えられる筈がない。これで勉強していらっしやい」と家内に三鷹市の広報を渡された。見ると「子ども科学あそびボランティア養成講座」（社会教育会館）とある。しかも無料である。

この社会教育会館は我家から歩いて3分の距離にある。これ幸いと申し込み，週1回8週間の授業をなんとかクリアした。生徒には子連れのお母さんが多く，私のようなオジイサン（81歳の方もいる）も混じっていた。先生は科学読物研究会・科学あそび分科会の方々でとても優秀だった。講座の仕上げにお隣の小学校で授業をさせて貰ったが，この時には目を見張った。お母さん達が授業すると子供たちの目がきらきらと輝くのである。そして教える母親たちの目も輝く。もともと彼女たちは理科好きだし，子どもを愛している。それが真剣に準備してくるから当然かもしれない。私は完全にかぶとを脱いだ。

このようにして養成講座を終えると，みんなが口を揃えてもっと続けようと言う。かくして会費ゼロのボランティア・グループ「三鷹科学あそびの会」が成立し，私も仲間入りさせて貰った。お母さん7名，オジイサン4名から出発したが，1年たった今は人数が倍以上になり，小学校での課外授業，公民館や図書館での実験講座などを行なっている。すでに忙しすぎる位である。おそらく皆さんは，誤りだらけの似非（エセ）サイエンスや奇術まがいのショーかと心配されるだろう。しかし，それは無用である。メンバーには現・元科学プロも多く，まったくのアマチュアはかえって真剣に勉強する。平均的な大学生の比ではない。さらに，この分野には先覚者たちが残されたよいリソースが豊富にある。常に，身近にある材料を使って簡単だが原理につながる実験をする。

昔，私は日本生化学会の教育委員会で科学教育を活性化する方策をいろいろと考えた。しかし最後まで良策を思いつかなかった。今，思い知ったのはお母さんたちこそ未来を担う子ども達への最高のサイエンス・コミュニケーターだということである。サイエンスを愛し，それに生涯を託したわれわれ生化学会員である。こういうお母さん達と一緒に，その黒衣（くろこ）になろう。そして時間を見つけ，自分でも子供に科学を教えよう。大木先生は「私は子どもから力を貰っている」とよく言われる。

*本会名誉会員，慶應義塾大学名誉教授，三鷹科学あそびの会共同代表